～研修医日記～

Vol.9　『トイレのキャサリンさん』　―馬刺し研修医編―

　初めまして、私は馬刺し研修医だ。
　私がなぜ馬刺し研修医と呼ばれているかは、神戸医療センター外科内ではもはや使い古されたネタで、最近はその話をしてもだれもクスリとも笑わない。おそらく外科の周術期管理を主に担当する、3 東病棟の看護師の中でもこのネタは旬を過ぎており、誰も笑わない。従って私が馬刺し研修医と呼ばれる所以は、今から端的に述べるが期待しないで聞いてほしい。
　準備は良いだろうか？
　「私はおそらく、日曜日の夜に食べた馬刺しによって食中毒を引き起こし、
　　嘔吐と下痢が止まらず、あくる月曜日の午後、入職後初めて仕事を早退した。」
　これだけである。実にしょうもないであろう。あまりのしょうもなさに自分でも消えてなくなりたい。しかし、この研修医日記を読んでくださっている読者の皆様に強調してお伝えしたいのは、私がしょうもないということだけでなく、神戸医療センター外科の先生方は食中毒の私にとても優しかったということである。外科部長をはじめ、ご存じ赤パン専修医、無礼講専修医含め全員が私の心配をしてくださり、月曜の朝に私の顔色を見て、異常を察知して 10 秒後にはポタコール輸液が処方され、ルートは赤パン専修医に瞬時に確保され、20 秒後にはポタコール輸液は全開で私の右前腕を通じて滴下され五臓六腑に染みわたっていった。そう、職場の上司は全員バリバリの医師だったのである。私は薄れゆく意識の中、患者の立場になって改めてその事実の有難さを思い知った。外科って素晴らしい！！ ❤
（「おい赤パン、こんな太い血管なら目をつぶってもルート入るやろ！」と、ルートを取っている赤パン専修医のマスクをずらしてアイマスクにしていた外科部長の完全に医療倫理に反する言動が聞こえたり見えたりしたのはきっと気のせいに違いない・・・・・・💧）

　こんなに優しくしてくれたのに、私はなんと、今回の研修医日記で赤パン専修医の悪事を告発しようとしている。皆様にはこれから私が書く文章を良く読んだうえで、改めて我が神戸医療センターでの初期臨床研修を本当に志望するのか、考えてほしい。
　今回の外科ローテーションで、私の指導医は赤パン専修医であった。赤パン先輩は実に丁寧に私を指導してくれた。少々のミスは、丁寧に教えてくださった上で、怒らずに、そして焦らずに、粘り強く間違いを正してくれた。ただしとんでもないミス（電子カルテ上の手術オーダーを当日その手術室で抹消した。）をした際は、若干目がカッと見開いていたように思う。
　そんな赤パン先輩の長所は、事務仕事の手際の良さや手術の手技だけではなく、患者さんご本人やその御家族との IC 形成時の説明の手厚さにもあった。まず、ゆったりとした口調で説明を開始し、それが何とも分かりやすい。また、患者さんからの質問は絶対にさえぎらない。赤パン専修医の IC はそれだけでも学ぶところがたくさんあった。この口調のまま怪しい壺を取り出して、患者さんと家族に巧妙に売りさばいてしまうのではないかと危惧したのも事実である。ただし、あまり

の優しい口調に患者さんやそのご家族がうとうとしてしまい、赤パン専修医が起こしていたシーンも散見された。私は「本末転倒」という四字熟語がなぜか頭に浮かびつつも「少し難しいお話が続いて疲れましたかね、申し訳なかったです。」とそれでも患者さんを気遣う赤パン専修医の大きな背中を「なんていい先生なんだろう！❤」と眺めつつ、自分の意識も薄らいでいくのを感じていた……💧

さて告発はここからである。赤パン専修医の IC のさらなる特色として、図説がある。赤パン専修医は肝臓、肝内胆管、総肝管、胆嚢、胆嚢管、三管合流部、総胆管、そして十二指腸乳頭までの流れを絵にかいて患者さんに説明するのが得意なのである。これは、本当に秀逸で、このくだりの時は、眠そうだった患者さんも目を輝かせ起きるのである。（当然私も眠気が覚める！）
良い話ではないか、そう思った読者の皆様も多いだろう。

問題はここからである。赤パン専修医は、とにかくペンを忘れるのである。IC も佳境に入り、いざ図説！となった際に、毎度赤パン専修医はハッとした顔になりながら空のポケットをまさぐり、お決まりの「馬刺し君、ペンあるかな？」が炸裂し、私はペンを差し出すのである。ペンの 1 本くらいいいじゃないか、という声が聞こえてきそうである。おっしゃるとおりだ、だから私はそれを指摘せずに、赤パン専修医がペンを忘れるたびにペンを差しだした。もはや赤パンだか赤ペンだか訳が分からなくなりそうだが、はっきりしていることは差し出したペンはのべ 6 本にのぼった。さすがに 6 本は多くはないだろうか？
それだけではない、ここから信じられないことが起きはじめるのである。
手始めには数日後の話だが、私が逆にペンを忘れて回診している際に、屈託のない笑顔で赤パン専修医は「馬刺し君、このペン余ってるからあげるわ！」と言い、あたかもペンをプレゼントする感じで、本来私の所有物であったペンを私に渡すのである。💢 こっちとしては赤パン専修医にペンを差し出しまくっているがゆえにペン不足に傾き、いわばペン繰りに苦渋しているというのにこの言いぐさである。💢 しかし、そこは上級医であるので、私は「くっ、、、ありがとうございます。」と心にもない言葉を発しつつ耐え忍んでペンを受け取っていた。💢 本当にいい先生なのに、どうしてこんな奇妙なペン癖で私を苦しめるんだろうか？（絶対に研修医日記のネタにしようと思っていた。）

お話はまだ終わらない。クライマックスは私のた●よう共済の 3 色ペンの話である。実は私は医学部時代、臨床実習時に法医学を専攻した時期があった。その際、車で移動する必要があったため、た●よう共済という組織が運営する保険に加入したのである。その際にもらったペンが、私のお気に入りの 3 色ペンであった。都合上、今後そのペンのことを『キャサリン』と呼ばせてほしい。私はキャサリンが大好きだった。❤ 外科の業務に追われていた時もキャサリンは私の白衣のポケットで学生時代に抱いた初心を思い出させてくれたし、何より薬の名前が印刷されがちな 3 色ペン業界のなかで、保険会社が印刷されている、異彩を放ったべっぴんさんであった。
しかし、赤パン専修医によって、私とキャサリンは引き裂かれてしまう。お察しの通り IC で例のごとく赤パン専修医のペン忘れが発動したのである。💢 私は「（必ずまた迎えに行くからな。）」と念

じながら、キャサリンを赤パン専修医に差し出した。
　そして数日後、外科手術後に手術内容を記帳する際に（これは研修医の仕事である）、記帳台のペン立てに、私はインクが少し減って着衣がやや乱れて捨てられていたキャサリンを見つけた。「キャサリン！大丈夫か？」 私はそっとキャサリンを胸ポケットに戻し、「（もう離さないぞ！）」と誓った、その夕方である。あろうことか赤パン専修医はまたICでペンを忘れ、また私は断腸の思いで取り戻したばかりのキャサリンを差し出した。💢💢

　それ以来、キャサリンの行方は知れず、外科のローテーションも終わってしまった。

　それでもいつでも探していた、どっかにキャサリンの姿を……
　向かいのホーム、路地裏の窓、交差点でも、夢の中でも、こんなとこにいるはずもないのに……

　キャサリンのことを一日たりとも忘れたことは無かったが、次第に心の傷は癒えていき、時間が解決してくれると思っていた・・・

　――　数か月後　――

　その日、消化器内科のローテーションが始まっていた私は便意を催し、研修医室のトイレの便器に座った。「（…紙がないな。）」私は、トイレの床に設置してある予備のトイレットペーパー入れに目をやった。
　その時である。
　「ばさしせんせ～……　ばさしせんせ～……」
　と消え入りそうな聞き覚えのある声が耳に入って来た！！
　「エッ！？」
　その時私は瞳孔を極限に散大させ予備のトイレットペーパー入れを凝視した……
　すると見たことがあるシルエットが予備のトイレットペーパーの下に横たわっていた。
　「まさか……💦」

（ここらへんから皆様各自のお好きなBGMを流しながら楽しんで下さい）

　他ペンの空似であろう、だって3色ペンなんか世の中に腐るほどあるのだから。
　頼む、違ってくれ！私は額に汗をにじませ、ケツをむき出しのままそのペンを拾い上げた。

　　た ● よ う 共 済 ……

そうしっかりと印刷されていた……
「あ～～～～～っ、キャサリ～～～ン！！💦💦」
ペン違いではなかったのである……
キャサリンのインクは今度は使い切られて空になり、着衣も乱れに乱れて捨てられていた。

私はケツをむき出しのままむせび泣いた。
「キャサリ～～～ン！ごめんな～～～、、、ごめんな～～～、、、！！💦💦」
その瞬間、私は赤パン専修医を研修医日記で告発することを誓ったのである。💢💢
　考えてみてほしい、赤パン専修医は私とキャサリンを二度引き裂いた上にキャサリンをもて遊びつくし、最後はトイレに捨てたのである。💢　最近、多目的トイレで不倫をしたことで叩かれているお笑い芸人がいるが、あの芸人ですらトイレに相手を捨ててはいないはずである。💢　しかもあの芸人は相手に会うたびに一万円を渡していたというが、キャサリンには一銭たりとも与えられていなかった……💢　そう考えて頂ければ今回の赤パン専修医の裏の顔の凄惨さはご理解いただけるのではないだろうか？私はこの話の信憑性を担保するために、捨てられたキャサリンの証拠写真を添付する。（ちゃんと手を洗ってから現場に戻り撮影したことを付記する。）
　私は、このような文章を外科に公式に提出する。どうかしていると自分でも思っている。でもおそらくは許されるのであろう。だってうちの外科の先生達はみんなとっても優しくて心が広いから、この文章を読んだ外科の先生達はきっと同情のあまりむせび泣いてくれるに違いないだろう！！そしてこの告発によって、今後はキャサリンみたいな哀れな被害者が決して二度と出ないような外科の体制が作られるように、切に切に願ってやまない……

――　そして、約1か月後　――

　病棟のとある一室の IC 現場から何やら聞き覚えのあるくだりが聞こえてくるではないか……

「・・・○○君、　ペンあるかな？・・・」😱

【変集者後記】
たかがペン1本、されどペン1本といったところだろうか？
しかしペン1本とはいえ、そこに人の思いが入ると、罪の意識のない些細な粗相が極悪非道でゲスな犯罪になってしまい莫大な恨みを買うということを思い知らされるノンフィクションの超大作ホラーに仕立てあがるようである。
いかんせん、この馬刺し研修医のキャサリンへの思い入れの強さは相当なものであったようだ。
それを知る由もなく、全く懲りない赤パン専修医・・・・・・・・・💧💧
みなさん、借りたものはちゃんと返しましょうね～！

刺